

資料

がん患者の死生観の実相に関する書籍の内容分析 — 看護への示唆 —

Content analysis of books on the reality of the view of life and death on cancer patients.
— Suggestions for Nursing —

杉江 柚奈¹⁾ 小田嶋 裕輝²⁾

キーワード：がん, 死生観, 実相

Key words : cancer, view of life and death, reality

要 旨

【目的】患者の闘病記より、患者の死生観を表現した内容を整理し、死生観の実相を明らかにし、看護上の示唆を得ることを目的とした。

【方法】Amazon.co.jpの書籍検索機能を活用して、キーワードを「がん」「闘病記」としてハンドサーチで検索し、がんを発症し死を迎えるまでの闘病記として出版された書籍から患者の死生観とその変化が読み取れた3件の書籍を内容分析した。

【結果】がん患者の死生観の実相として、【がんを機に自分の人生の俯瞰】、【がんサバイバーとしての生活を通じた死生観の深まり】、【昇華した自らの死生観に照らして最期までよりよく生きることを決断】の3つのコアカテゴリーが抽出された。

【結論】患者を取り巻く環境の一員である看護者が見守ったり言語化を促したりすることで、がんと共生する契機となる可能性や、宗教的な知見に触れる機会を設けたり、他者との関係性を保ち自分の所属する社会とのつながりを保てるような関わりの重要性や、患者の昇華した死生観を理解し、その死生観に基づく患者の行動を支える支援を行うことの必要性が示唆された。

I. はじめに

日本における終末期医療である緩和ケアは、1960年代より広がりを見せた。2006年のがん対策基本法の施行により、日本における緩和ケアは、がん患者に力点が当てられる形で推進されてきた。一方、この間、日本の平均寿命は男性で81.41歳、女性で87.45歳に2019年で達し（厚生労働省, n.d.）、75歳以上の超高齢者の尊厳・意思決定・適切な緩和ケアなどのエンド・オブ・ライフケアの在り方に関心が向けられている（矢野, 2019）。このエンド・オ

ブ・ライフケアの本質は、その人が最期まで最善の生を生きることであるとされ、自らの生と死を考え、自らの社会関係の中での尊厳を問うていくことの重要性が提唱されている（長江, 2014）。よって、この概念は高齢者に限らずあらゆる年代に当てはまるといえる。

がん患者のエンド・オブ・ライフに必要なのは、その「生」を支える死生観である。看護学において、がん患者の死生観に関連した先行研究では、がん患者が最期まで生き抜くためには、がんと生活の中で自分が生きていく意味を見出すことなどの重

受理日：2021年9月1日 採択日：2021年10月4日

¹⁾名古屋市立大学看護学部看護学科 ²⁾名古屋市立大学大学院看護学研究科

要性を報告したものがあある(植村, 齊藤, & 多留他, 2018). また, 死を意識した患者は, 生と死というすべての生きものにとっての不変の真理を神秘的で自分の力は及ばないものと感じながらも, 【生かされていると感じながら, 最期まで精一杯生きたいという死生観】などがあると報告されている(京田, 神田, & 加藤他, 2010).

死生観は, 闘病期間, ホスピス入院期間の長い患者, 宗教を持った患者に数多く見られ, 死に対して肯定的, 積極的な内容が多く, 死を苦痛からの開放と考える傾向があり(細井, 川邊, & 川原他, 2001), 年代や死別体験などの有無によっても異なるとされ, 個別性が高く, 質的研究の積み重ねの重要性が示唆されている(富松 & 稲谷, 2012).

死生観についての過去の看護研究はがん患者を中心になされているが, その死生観の質的な内容そのものである実相を取り上げた研究は少なく, 患者の死生観に寄り添った看護支援を考える上で, がん患者の死生観の実相の一端を明らかにしておくことは意義があると考えられる。

II. 目 的

患者の闘病記より, 患者の死生観を表現した内容を整理し, 死生観の実相を明らかにすることにより, 看護上の示唆を得ることを目的とした。

III. 用語の定義

1. 死生観

生きることと死ぬことに対する考え方, または判断や行動の基盤となる生死に関する考えを指す。

2. 実相

実際のあり様を指す。

IV. 方 法

患者の死生観を表現した文献として, 公刊されている書籍の内容分析を行うこととした。理由は, 自らの病気の進行に伴う死生観の変化が詳細に記載されていると考えたからである。検索方法は, Amazon.co.jp の書籍検索機能を活用した。具体的には, カテゴリーを「本」とし, 「がん」「闘病記」などのキーワードを入力し, ハンドリサーチで患者の死生観について述べていた5件の書籍を取り寄せ

た(検索日:2020年9月6日)。5冊に絞った理由は, 検索結果の各書籍の説明内容を読み込む中で, がん患者が最期を迎えるまで, がんと闘病し, 生き抜く過程を記載した書籍であり, 患者自身の死生観や闘病を通しての死生観の変化を述べている可能性が高いと判断したためである。次に, 5件の書籍を精読し, 患者の死生観とその変化が読み取れた3件を分析対象とした。分析は各書籍から, 患者に特徴的な死生観や死生観に関連した記述(余命宣告の状況, 思い, 対象自身, 亡くなるまでの向き合い方など)を抽出してコード化し, 意味内容の類似性に従ってカテゴリー化した。倫理的配慮として, 著作権の保護のため, 参考または引用した文献の出典を明記した。分析過程と妥当性は質的研究に詳しい研究者のスーパーバイズを受けることで確保した。具体的には, 信頼性はコードを作成する際, 原文の内容や文脈に立ち返って研究者間で一致するまで行った。妥当性は, 研究者間でカテゴリー化を何度も検討し直すことで確保した。以下, 本文中において, 抽出されたコアカテゴリーは【 】, カテゴリーは< >で表現した。

V. 結 果

1. 分析した書籍

肺カルチノイドを罹患した享年41歳の男性の著書(金子, 2014), 肝臓がんを罹患した享年25歳の女性の著書(山下, 2018), 小児がんであるユーイング肉腫に罹患した享年9歳男児の親の著書(山崎, 2007)である。

2. がん患者の死生観の実相

がん患者の死生観の実相として, 【がんを機に自分の人生の俯瞰】, 【がんサバイバーとしての生活を通じた死生観の深まり】, 【昇華した自らの死生観に照らして最期までよりよく生きることを決断】の3つのコアカテゴリーが抽出された。各コアカテゴリー, カテゴリー, サブカテゴリーの内容を表1に示す。

1) 【がんを宣告される前までの自分の人生の俯瞰】

本コアカテゴリーは, 4 カテゴリー, 10 サブカテゴリー, 41 コードから構成された。具体的には, カテゴリーは, <がんを機に自分の人生を振り返る>, <自分の病気のことを知らせ

表1 がん患者の死生観の実相

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	
がんと宣告される前までの自分の人生の俯瞰	がんと機に自分の人生を振り返る	自分の人生を大きく振り返った	
		これまでの自分の価値観や夢の形成に影響を及ぼした人生を振り返った	
	自分の病気のことを知らせずに他人の気持ちに伝えていきたい	自分の仕事や他人の期待に応えることに生きがいを見出した	
		自分の病気を理由に周りの人に迷惑をかけたくなかった 他者がこれまでの自分に持っていたイメージを崩されなくなかった	
がんであることを受け入れるのが辛い	本当のことを伝えたいという自分の気持ちと向き合うことが辛かった がんになった自分を受け入れるプロセスでもがきあえいだ		
がんの根治に希望を抱きつつも優先順位をつけて行動する		治療に専念しないことで自分の寿命を縮めているという気持ちがあった	
		がんの根治に希望を抱きつつも、やりたいことに優先順位をつけて取り組んだ がんをきっかけに行動的になった	
がんサバイバーとしての生活を通した死生観の深まり	治療を続けながら今生きていることに感謝し社会とのかかわりを持ち続ける	生きる希望となっていたレギュラーの仕事や旅行はやめなくなかった	
		生きがいの仕事を体力が消耗しても続けたかった	
		治療をしながら社会とかわり続けることを決断した 今生きているという経験を活かして世の中の役に立ちたいという気持ちになった	
	がんをきっかけに死生観について自然的・意図的に深めていく	死生観を深めるための意図的な学びを行った 仕事ややりたいことができなくなり死へ向かうことへの恐怖心と対峙した 与えられた時間が有限であることを考えることで死生観が深まっていった 自分にとってのがんの意味付けを考えるようになった	
自分に関わり支えてくれるすべての人に感謝する		家族、友人、宗教観の同じ人に精神的に支えられた 全てのことに感謝し喜びを見出せるようになった 友人と関わることそのものが喜びであった	
		がんを受け入れ、絶望せずに希望を見出す	延命治療はしないという決断をした 根治不能ながんを受け入れ絶望せず希望を見出す
昇華した自らの死生観に照らして最期までよりよく生きることを決断	がんの再発や死への恐怖心を自覚する一方でその気持ちを避ける行動をとる	仕事に集中し死の恐怖感と向き合わない	
		がんの再発や死の恐怖の気持ちと向き合う	
		がんから逃れられる道があると思う	
	仕事や家庭生活の中に治療を組み入れる	治療のみに専念しない	
		治療を受け続ける	
		治療、仕事、家庭生活とのバランスを整える	
		楽しみとなる生活目標を持つ 生きたいと強く思う	
	他者の役に立っていることを実感する		仕事にこれまで以上の価値を実感する 誰かの役に立っていると思う
			がんであることを深く悩まず生きる決意をする
	他者への感謝を表し自分にできる助言を行う		自分に関わってくれる他者への感謝を表現したいと思う 困っている友人の気持ちを理解し助言する
自分の最期までの過ごし方とその後をプロデュースする			自分のしたいことや新しいことにチャレンジする 自分の最期をプロデュースする 自分の死後に家族が困らないようにする

ずに他人の気持ちに伝えていきたい>、<がんであることを受け入れるのが辛い>、<がんの根治に希望を抱きつつも優先順位をつけて行動する>から構成された。

2) 【がんサバイバーとしての生活を通した死生観の深まり】

本コアカテゴリーは、4カテゴリー、13サブカテゴリー、55コードから構成された。具体的には、カテゴリーは<治療を続けながら今生きていることに感謝し社会とのかかわりを持ち

続ける>、<がんをきっかけに死生観について自然的・意図的に深めていく>、<自分に関わり支えてくれるすべての人に感謝する>、<がんを受け入れ、絶望せずに希望を見出す>の4カテゴリで構成された。

3) 【昇華した自らの死生観に照らして最期までよりよく生きることを決断】

本コアカテゴリーは、6カテゴリ、18サブカテゴリ、83コードから構成された。具体的には、カテゴリは<がんの再発や死への恐怖心を自覚する一方でその気持ちを避ける行動をとる>、<仕事や家庭生活の中に治療を組み入れる>、<他者の役に立っていることを実感する>、<がんであることを深く悩まず生きる決意をする>、<他者への感謝を表し自分にできる助言を行う>、<自分の最期までの過ごし方とその後をプロデュースする>の6カテゴリで構成された。

VI. 考 察

がん患者の死生観の実相として抽出された3つのコアカテゴリーごとの考察を以下に行う。

1. 【がんと宣告される前までの自分の人生の俯瞰】

がんは自分の生命や人生に大きな影響を及ぼす病気である。先行研究では、日常の生活の中でも起こり得るが、人が生命を脅かす体験や人生を変えるような出来事に直面したときに、自身や環境との相互作用の中で、内的・外的境界を拡張しながら今を生きる意味や新たな見地を見出していく能力であるセルフ・トランセンデンスを、がん患者にも促進する支援の必要性が示唆されている(青木 & 藤田, 2018)。また、限られた命を生きるがん患者は、生への希求と穏やかな死への望みの間の揺らぎなどを体験するため、患者にそれまでの人生を振り返る問いかけを行う看護の有用性を示唆した報告もある(京田 & 神田, 2018)。よって、宣告を受けた患者が自身の激しく揺らぐ気持ちを受け止めつつ、自分の人生を俯瞰していく局面は必要であり、看護者は患者を取り巻く環境の一員として、【がんと宣告される前までの自分の人生の俯瞰】していく患者のプロセスを見守ったり言語化を促したりすることで、

がんと共生する契機を提供していくことが大切なのではないかと考える。

2. 【がんサバイバーとしての生活を通した死生観の深まり】

対象とした書籍のがん患者は、<がんをきっかけに死生観について自然的・意図的に深めていく>ために、<治療を続けながら今生きていることに感謝し社会とのかかわりを持ち続ける>ことで、<自分に関わり支えてくれるすべての人に感謝する>ことや、<がんを受け入れ、絶望せずに希望を見出す>というプロセスをたどり死生観を深めていった。

3件中2件の書籍において、死生観を深めるきっかけに宗教的な学びを行っていた。先行研究では、信仰により病気を乗り越える上での支えとなったことを報告している(松下, 片山, & 荒木他, 2020)。また、残り1件の小児がん患者を対象とした書籍では、友人との関わりを保つことで<自分に関わり支えてくれるすべての人に感謝する>ことにつながっていた。先行研究では、小児がん経験者の死生観の構成要素の一つに「生きている意味、存在の意義を見出そうとする」ことがあると報告している(益子, 高橋, & 二渡, 2012)。よって、【がんサバイバーとしての生活を通した死生観の深まり】を支援するために、宗教的な知見に触れる機会を設けたり、他者との関係性を保ち自分の所属する社会とのつながりを保てるような関わりが看護者として有用である可能性が示唆された。

3. 【昇華した自らの死生観に照らして最期までよりよく生きることを決断】

対象とした書籍のがん患者は【昇華した自らの死生観に照らして最期までよりよく生きることを決断】として、<がんであることを深く悩まず生きる決意をする>ことをし、<がんの再発や死への恐怖心を自覚する一方でその気持ちを避ける行動をとる>、<仕事や家庭生活の中に治療を組み入れる>、<他者への感謝を表し自分にできる助言を行う>、<自分の最期までの過ごし方とその後をプロデュースする>行動をし、<他者の役に立っていることを実感する>という、よりよく生きることを決断していた。先行研究では、肺がんに罹患するという逆境体験か

ら見出す認識や能力、行動などの肯定的な変化の内容として、人生と向き合える、他者のことを気に掛ける、逆境に向き合うための術が増えるなどがあると報告している(前田 & 竹田, 2020)。よって、看護師は患者の昇華した死生観を理解し、その死生観に基づく患者の行動を支える支援を行うことの必要性が示唆された。

Ⅶ. 結 論

がん患者の死生観の変化を表現した文献の内容を整理した結果、患者の死生観の実相には、【がんを機に自分の人生の俯瞰】が、【がんサバイバーとしての生活を通じた死生観の深まり】をもたらし、【昇華した自らの死生観に照らして最期までよりよく生きることを決断】に至るというプロセスがあった。看護上の示唆として、患者を取り巻く環境の一員である看護師が見守ったり言語化を促したりすることで、がんと共生する契機となる可能性や、宗教的な知見に触れる機会を設けたり、他者との関係性を保ち自分の所属する社会とのつながりを保てるような関わりの重要性や、患者の昇華した死生観を理解し、その死生観に基づく患者の行動を支える支援を行うことの必要性が示唆された。なお、本研究結果はがん患者の死生観に関する書籍の一部を分析したものであり、一般化には限界がある。

利益相反

論文内容に関し開示すべき利益相反の事項はない。

文 献

青木早苗, 藤田佐和. (2018). セルフ・トランセンデンスの概念分析; がん看護における概念活用の有用性. 高知女子大学看護学会誌, 44 (1), 2-11.
細井順, 川邊圭一, 川原啓美, 他. (2001). ホスピス患者の死生観. 死の臨床, 24 (1), 58-61.
金子哲雄. (2014). 僕の死に方; エンディングダイアリー 500 日. 東京; 小学館.
厚生労働省. (n.d.). 令和元年度簡易生命表の概況: <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life19/index.html>. (2021.8.28 閲覧)
京田亜由美, 神田清子. (2018). 自宅で限られた命を生きるがん患者の "生と死" に関する体験. 日

本看護研究学会雑誌, 41 (5), 959-969.
京田亜由美, 神田清子, 加藤咲子, 他. (2010). 死を意識する病を抱える患者の死生観に関する研究内容の分析. 北関東医学, 60 (2), 111-118.
前田智樹, 竹田恵子. (2020). 肺がん患者における Benefit Finding の内容とその獲得に関連する事柄. 川崎医療福祉学会誌, 30 (1-1), 157-163.
益子直紀, 高橋ゆかり, 二渡玉江. (2012). ライフストーリーからみた小児がん経験者の死生観. 日本看護学会論文集; 看護総合, 42, 184-187.
松下年子, 片山典子, 荒木とも子, 他. (2020). 日本人信者の信仰と癒し, 看護に関する認識; 信者と聖職者を対象としたインタビュー調査. アディクション看護, 17 (1), 16-42.
長江弘子. (2014). エンド・オブ・ライフケアの概念とわが国における研究課題. 保健医療社会学論集, 25 (1), 17-23.
富松梨花子, 稲谷ふみ枝. (2012). 死生観の世代間研究. 久留米大学心理学研究, 11, 45-54.
植村優衣, 齊藤奈緒, 多留ちえみ, 他. (2018). 在宅終末期がん患者が療養生活において体験した困難を乗り越えていくプロセス; 終末期を在宅で過ごした A 氏の事例を通して. ホスピスケアと在宅ケア. 26 (3), 351-357.
山下弘子. (2018). 雨上がりに咲く向日葵のように; 「余命半年」宣告の先を生きるということ. 東京; 宝島社.
山崎敏子. (2007). がんばれば, 幸せになれるよ; 小児がんと闘った9歳の息子が遺した言葉. 東京; 小学館.
矢野真理. (2019). 超高齢者のエンド・オブ・ライフケアに関する文献検討. 日本赤十字看護学会雑誌, 19 (1), 49-57.